

はじめに モモと歩く東京——時間論としての街歩き

(1) 「街歩き」は何を生んでいるのか

今、街歩きが盛んです。このブームを大衆的なレベルで象徴するのは、もちろんNHKの「プラタモリ」でしょう。二〇〇九年に第一シリーズが放映され始めた頃は、木曜の夜遅い時間帯の番組でしたが、二〇一五年から土曜の夜七時台に移り、視聴率も一〇%以上と、すっかりメジャーな番組になりました。ただ、内容的には木曜夜遅く、フィールドも東京圏に絞っていた頃の方がずっと充実していた気がします。対象が全国に広がり、土曜のゴールデンタイムに移ってからは、何だか普通の観光番組になってしまった印象があります。

「プラタモリ」人気の背景には、高齢化と余暇時間の増加、健康ブームでちょっと街歩きをして今まで知らなかった土地の歴史に触れ、自分の健康にも役立てたいという層が拡大している

ことがあるでしょう。しかし、街歩きの隆盛をいくつかの社会学的要因で説明することよりも、もっと大切なことがあります。それは、「街歩き」によって身の回りの都市の経験のされ方が変化してきていることです。渡辺裕さんは『まちあるき文化考』（春秋社、二〇一九年）で、街歩きのブームがさまざまなメディアコンテンツによる物語化と不可分な関係にあるとし、「見慣れた土地の風景が、ちよつと見方を変えることで新たな光のもとに見直され、そこに今までになかった価値が賦与」されていると論じます。

渡辺さんの「まちあるき」コンテンツツツーリズム」論のポイントは、街歩きが単なる物語の追体験以上のものだという認識です。たとえば彼は、コンテンツツツーリズムの原型として「文学散歩」に言及しますが、そこで実践されてきたのは、単なる作品の読者による追体験ではなく、「作品を現実の都市と結びつけ、重ね合わせる」生産的な場の生成でした。そこではまず、「作品との関わりの中で都市の記憶が形作られ、また変容を蒙りつつ、われわれの中に刻み込まれ」ます。しかし、そうした作品を通じた集合的記憶は、その都市を巡る集合的イメージが形作られる基盤ともなり、そうしてメディアのなかの物語は「都市の側にも投げ返され、そのイメージを作り変えてゆくというダイナミックな関係」が生み出されます。「街語り」と「街歩き」と「街づくり」のトライアッドな関係が存在するのです。

このように経験の場としての都市Ⅱテキストという前田愛以来の都市論の系譜上で現代の街歩きを捉え返すなら、私たちが日常のなかで自明化しているのは異なる時間がそこで経験されていることに気づきます。いうまでもなく、文学は日常とは異なる時間の経験であり、この点では映画やマンガ、音楽、さらにはテレビドラマですら同じです。近代産業社会は、人々の日常の時間を画一化する一方で、さまざまなメディア消費を通じて人々に産業的時間とは異なる時間経験を提供してきました。人々は、街歩きを通じ、メディアの物語に編み込まれている時間と、現実の都市に流れている時間の間を何度も跳躍するのです。

ですから街歩きの本質は、日常とは異なる物語的時間を、日常的な都市風景のなかで生きることにあります。これは、たとえば若者たちの「聖地巡礼」に顕著です。聖地巡礼とは、アニメやマンガ、ドラマなどの舞台となった土地や、登場人物に関わる場所に、物語のファンが訪れ、その「聖地」で自分なりの物語を体験し直す現象を指します。ファンは、しばしばその場所にいる自分を撮影してネットに公開します。つまりこの現象は、①ある場所や施設のメディアによる物語化、②ファンによる物語の消費を通じた「聖地」のイメージ構築、③ファンたちが「聖地」として名指された場所を実際に訪れることによる地域の変化、という三つのプロセスを含みます。「聖地」が構築されていくプロセスはメディア論的過程なのですが、「聖地」自

体は地理的な場所として生きられるのです。

そして、これがまさに「聖地」への「巡礼」として意識されているのは、この実践が何らかの宗教的とすらいえる心的モメントを内包しているからです。当然、太古からある宗教的な聖地と、現代のこのメディア的な「聖地」の関係が問われますが、両者を成り立たせるメカニズムには同型性もあります。実際、アニメやマンガでは必ずしも作品のなかで描かれている場所がどこをモデルにしているかは明示されませんが、ファンたちは作品に示されるさまざまな徴候から、描かれているのがどこであるかを推理し、発見的に「聖地」を作り上げていきます。このプロセスは、前近代の人々が、さまざまな徴候から、その土地を聖典に書き込まれている出来事と対応させて「聖地」に仕立てていた解釈実践と似ています。

しかし、メディアの媒介で形成される「聖地」と、太古からの人類的営みのなかで形成されてきた「聖地」には、質的な違いもあります。後者では、ある場所が聖地になっていく際、何らかの物語での言及よりも、その土地のトポグラフィカルな地勢が大きく作用します。方角や高低、水辺との関係、都市や集落の境界線との位置関係などが決定的に重要です。ある場所が聖地になるのは、その場所がそれ以外の空間領域から切り分けられ、特別な意味を付与された場所になるからです。この切り分けがメディアのイメージに起因するのか、それともその場

所の地勢や風景に起因するのは、やはり大きな違いなのです。

複製技術の爆発が私たちの経験の形式を根底から変えていった近代は、メディアのなかの場所イメージが、実際のその場所における経験を覆っていく過程でした。近年の街歩きの隆盛は、一面ではその極致です。街歩きを通じ、私たちはメディアの語りを追体験しているのです。しかしそれは、同時に人々が実際に街を歩くことにより、その身体的行為を通じた経験の組み直し、つまりその土地の具体的な場所と風景のなかで、私たちの都市経験が発見され直していく契機を含んでいます。「複製技術」と「アウラ」をめぐるヴァルター・ベンヤミンの問いを、このように再定式化することは不可能ではないと私は考えています。

(2) 都市に積層する時間層の間を歩く

ここでカギとなるのが、経験の時間性です。都市が空間的な存在なのは、それが同時に時間的な存在だからであり、私たちは都市を、空間的であると同時に時間的な場所の連なりとして経験しています。もっと平たくいうならば、私たちが経験する都市には、さまざまな異なる時間が空間化されて積層しています。街歩きをするということは、その異なる時間の間を移動していくことであり、私たちが十分に敏感であるならば、同じ一つの地域の街歩きにおいても、

そこに重層するいくつもの時間とその切れ目を発見していくことができるのです。

私たちがこれから街歩きで経験する時間のなかで、この都市のあちこちに顔をのぞかせる最も深い時間層は、太古からの地球史的な時間です。中沢新一さんは『アースダイバー』（講談社、二〇〇五年）で、まさにこの時間を掘り起こしました。中沢さんが論じたように、東京には、まだ地球が氷河期だった時代に形成された洪積層の台地と、その最後の氷河期が終わった約一万年以前以降に川や海が運んだ土砂が堆積してできた沖積層の低地という、二つの地質学的時間が重層しています。前者が武蔵野台地であり、後者がそれを東西方向に何匹もの蛇のように裂く川筋や谷筋の土地です。中沢さんの著書が「TOKYO EARTH DIVING MAP」として掲げる地図は、東京の時間的古層を見事に表現しています。

東京の古い神社や寺院は、そのほとんどがこの洪積台地と沖積低地の境界線、台地の崖上に立地してきました。古代人は、海辺や川辺に突き出した岬のような台地の突端部分に強い靈性を感じ、そこに「石棒などを立てて神様を祀る聖地を設けた」のだと中沢さんは推理します。そして、これらの台地突端に形成された聖地は、その後の長い江戸や東京の歴史においても、時間の進行の異様に遅い「無の場所」になっていきます。近代化も、「無の場所」は簡単には消去できませんでした。こうして、「猛烈なスピードで変化していく経済の動きに決定づけら

れている都市空間の中に、時間の作用を受けない小さなスポットが、飛び地のように散在しながら、東京という都市の時間進行に影響を及ぼし続けている」のです。

本書の街歩きが訪れる東京の社寺には、徳川家康以前まで遡るものが少なくありません。それらの社寺は、この地方の洪積台地と沖積低地が入り組んで形成される岬に先住民たちが見出しだしていた無数の聖地の、そのごく一部が近世以降も生き残ったものです。それらの社寺の立地の深層には、この地の地形が抱え込んでいる集合的記憶の古層が広がっているのです。

だからこそ、東京の古層の時間と出会うためには、川筋や台地の際が特別に重要です。私たちがこれから街歩きをしようとしているのは、主に上野台地と本郷台地の東の一带で、この二つの台地は隅田川と石神井川、神田川という三つの川で境界づけられます。かつての石神井川の下流は不忍池を含み、神田川の下流は今の日本橋川を含みます。これらの川と台地のさまざまな際に、私たちは中世、古代以前まで遡る時間の層を見出していくでしょう。

しかし、自然は文明に、冷たい時間は熱い時間にどこかで制圧され始めます。それが、この地球上での過去数千年に及ぶ人類の歴史でした。文明的秩序による東京の自然地形の制圧は、最初に徳川家康がここで大規模な都市改造に着手した時から始まります。本書の街歩きでも訪れるように、仙台堀開削による神田川の流路変更はそのクライマックスでしたが、徳川幕府は

外堀の開削や日比谷の埋め立て、市街地での多数の堀の開削によって、近世都市江戸を、文字通り「水の都市」として大発展させました。江戸の時間層は、それ以前の太古からの時間層を抹殺したわけではなく、むしろそれを巧妙に利用していったと思います。その巧妙さは、とりわけ幕府の不忍池や上野台地の利用法に顕著です。

東京の地層と結びついた中世以前の時間と徳川幕府の都市改造が実現した近世の時間の関係が、対立的というよりも再利用的であったのに対し、近世と近代の時間の関係ははるかに敵対的です。東京の歴史的時間に再び断層が入るのは明治維新期ですが、そこで政策的に演出された近代の時間は、近世までの江戸の時間層を全否定しました。

この敵対的な否定のプロセスを最もはっきり示すのは上野で、この地が公園となり、ここに博覧会場や博物館、動物園、大学などが建てられていくなかで、江戸の聖地として栄華を誇った寛永寺境内は粉々になります。それにもかかわらず、私たちが街歩きで確認していくように、現代の上野には、なお中世以前の時間層と近世江戸の時間層、さらに明治以降の時間層が共存しています。明治国家は東京を、近代的な時間だけで埋め尽くせなかったのです。戦後になってもまだ、東京には古層へと至る過去の時間が幾重にも堆積し続けました。

同じような異なる時間の積層は、高速道路の下の川筋を子細に眺めることによって、はっ

きり浮かび上がってきます。これらの川の底に見えるのは、「アースダイバー」たちが掘り起こす沖積層の時間です。そしてこの沖積層の土砂を削って両岸に築かれていった江戸の石垣が、今もまだ残っています。さらにその川筋には明治以降、日本橋から聖橋^{ひじりばし}までのいくつもの見事な石やコンクリートの橋が架けられ、それが今日でも川筋のランドスケープの要になっています。やがて高度成長期、このすべての歴史的時間の重層に、首都高速道路が蓋^{ふた}をします。したがって、中世から近世、近代までの異なる時間の積層が今も東京の足元にあることは、高速道路の下の水上を移動すれば如実にわかりますが、普段、高速道路や一般車道を移動している限り、まったく気づくことができません。

こうした異なる時間の積層には、他にも東京都心のさまざまな場所で遭遇することがあります。私たちは、やがて東京大学の本郷キャンパスでも、同じような複数の時間層が、ほとんど放置されているような仕方と並存しているのを発見するでしょう。実際、このキャンパスを注意深く歩けば、弥生時代の痕跡にも、江戸の姫や奥女中たちが過ごしていた時間の痕跡にも、そしてもちろん明治以降の国家が推進しようとした時間の痕跡にも出会うことになります。そして、このキャンパスがそうした異なる時間層を擁しているのは、ここが本郷台地の際から不忍池に向かう斜面にあるという地形的特徴と深く結びついています。

ですから私たちがこれからする街歩きは、空間的な旅であると同時に時間的な旅です。私たちはこの東京に積層している異なる歴史的時間をワープします。そうした旅において注意深くなければならぬのは、時間と時間の断層、異なる時間の境界線をまたぐ時です。このタイムマシンは、ただ乗っていれば目的地に到着するのではなく、自分の足で注意深く時間と時間の断層をジャンプしなければなりません。散漫に歩いていると、表面を覆う現代の風景に気が取られて、その端々に走る断層、つまり現代都市のあちらこちらに、その都市の歴史の無意識が噴出する切れ目があることに気づかないで通り過ぎてしまいます。街歩きの達人は、歴史の遊歩者です。しかしその歴史は、数万年から数十年までの異なる幅で地層をなして街のあちらこちらに露出しています。私たちには、現代都市の考古学が必要なのです。

(3) モモと一緒に東京を街歩きする

ミヒヤエル・エンデの『モモ』（大島かおり訳、岩波書店、一九七六年）は、ある年齢以上の人ならば大概は読んだことのある児童文学の傑作です。モモは、大都会のはずれの古代の円形劇場の廃墟はいきよに住む小さな女の子で、彼女はカメラとともに時間泥棒たちから盗まれた時間を取り返します。「灰色の男たち」として描かれる時間泥棒たちは、いうまでもなく現代資本主義のメ

タフアーです。彼らは、「時間節約をしてこそ未来がある！」と街の人々に囁きかけ、それと呼応するかのようラジオやテレビ、新聞は、「時間のかからない新しい文明の利器」がいか
に役に立つかを強調し、生活の効率化こそが「人間が将来『ほんとうの生活』ができるように
なるための時間のゆとりを生んでくれる」と約束しました。知らず知らずのうちに、人々は自
分の時間を明け渡し、つまり、より効率的で便利な日常に身を置くようになるのです
が、そうするとますます忙しくなり、彼らの「一日一日は、はじめはそれとわからないほど、
けれどしだいにはつきりと、みじかくなつて」いったのです。

モモは、そうした「灰色の男たち」の合理性がまるで通用しない他者でした。ですからモモ
と時間泥棒たちとのぎりぎりの闘争として描かれるこの物語が、現代資本主義に対する時間論
的批判であることは広く知られています。

しかし、ここで改めてこの作品に注目したいのは、この物語が、近代を超える時間論である
と同時に都市論でもあるからです。物語は、時間論的にと同時に、空間論的にも展開していま
す。モモが住みついた円形劇場は古代都市の痕跡です。円形劇場が栄えていた時代から長い時
間が流れ、かつての「大都市はほろび、寺院や宮殿はくずれおちました。風と雨、寒気と熱気
に、石はけずられ穴があいて、大劇場も廃墟と化しました」。しかし、それでも今日、現代都

市の「新しいビルディングのあいだのそこここに、むかしの建物の円柱や、門や、壁の一部がのこっています」。そして、モモがその忘れられた古代都市の痕跡に住みついたのは、決して偶然ではありません。

現代都市の開発の波はこの廃墟の円形劇場の近くにまで迫ってきます。モモの親友の一人は「道路掃除夫のベツポ」でしたが、彼は大昔の市の外壁あたりを掃除していた時、その外壁にはめ込まれた他の石とは違う色のいくつかの石を見つけ、そのような石のはめ込みをしたのは「昔の自分たち」だと言いました。都市の風景を凝視すると、「その底のほうに、ほかの時代がしずんでいる、ずっと底のほうに」と彼はモモに語りかけています。

その一方で、モモは男たちの追跡を逃れ、カメに導かれるままにこの都市の迷路のような路地を抜け、荒廃し老朽化した地区を通ります。そこでモモが見たのは、「黒いまっ四角の石の台の上に、ものすごく大きな白い卵」を置いた記念碑であり、道沿いの家は、人間が「住むためのものではなくて、なにかべつの、よくわからないふしぎな目的のためにつくられている」ようでした。その先には、時間の流れが反転してしまふ「さかさま小路」があり、この小路を後ろ向きに進むと古代ギリシャの時間神、クロノスのような老人の住む「どこにもない家」にたどり着きます。老人が人間に時間を手渡す存在であることはすぐに明かされますが、謎解き

の会話の後、モモは老人に「あなたは死なの？」と尋ねます。

エンデがここで描いた「さかさま小路」や「どこにもない家」は、実はどの都市にも存在する場所だと私は思います。それは、墓地です。「ふしぎな目的のためにつくられている」とモモが思いながら通り過ぎたのは、墓地に林立する墓のイメージに近く、エンデは、生きられる時間が創造される源となる場所として廃墟と墓地を、逆に生きられる時間が失われていく場所としてせわしなく活動が繰り返り広げられるオフィス街を捉えています。廃墟に住むモモが時間泥棒から人間の時間を取り返せたのは、彼女だけが遠くの過去からの声、死者たちの記憶の声と自分の心のなかの声を響き合わせることができたからです。

私は、このようなモモを私たちの街歩きのもう一人の隠れた随伴者にしたいと思います。モモと一緒に歩くには、「さかさま小路」に向かう地区で「オソイホド ハヤイ」、つまりゆっくり歩けば歩くほど前に進むことができた彼女の経験を踏まえなければなりません。街を速く移動しすぎることは、街を見失うことです。

街を見失わないために、ゆっくり移動することの価値を復権させましょう。エンデが『モモ』のなかで示した時間論を、私たちは東京の街歩きにも活かしましょう。この東京都心の街歩きでは、過去が常に現在の都市のなかに存在し続けていることを確認し、同時に都市をゆっ

くり動いていくことの価値を再発見していきたいと思えます。何よりも、モモの冒険が「灰色の男たち」から人々の時間を取り返す挑戦であったのと同じように、私たちの街歩きもまた、高度成長期以降の開発主義の東京から、再び人間的時間を取り返す戦略を含むことになります。

(4) 七日間の都心街歩きを始めよう

私たちはこれから、ちょうど一週間の東京都心街歩きをしていきます。都心といっても、本書で焦点を当てるのは都心北部、つまり千代田区北部、文京区、台東区を中心とする地域です。北は都電荒川線、東は隅田川、南は日本橋川、西は飯田橋から王子までの地下鉄南北線で囲われたあたりを、これからの街歩きのメインターゲットとします（ただし、都電荒川線沿線はそれ外も含みます）。なぜ、この地域に注目するのかについては、本書で繰り返し説明しますが、一言でいえば、この都心北部は、戦後の高度成長期、とりわけ一九六四年の東京オリンピック前後になされた都市改造で周縁化されてきた地域だからです。

明治・大正期まで、この都心北部地域は東京の文化的中心でした。明治維新以降、さまざまな制圧や改造がこの地域を襲いましたが、それでもその文化的中心性はなかなか失われませんでした。しかし、戦後の東京改造は、これらの地域を根本から変え、東京の文化的中心は南西

の港区、渋谷区、新宿区へと移ります。東京の超高層化は、現在もこの転換の延長線上でなされていきますが、他方、近年の街歩きは、ピカピカに再開発された都心南西部よりも、むしろいぶし銀的な都心北部で盛んです。私たちは、この地域で街歩きを重ね、今、東京という都市で経験される時間軸に、どのような変容が生じているのかを考えます。

七日間の街歩きですが、大まかに最初の二日間と次の二日間、さらにその次の二日間がそれぞれセットになっており、川筋を回る第七日に、できるだけそれまで回ってきた諸地区全体をつなぎたいと考えています。そして、このすべての街歩きが、東京という都市の時間をテーマにしています。

最初の二日間で焦点にしているのは、移動の速さです。東京のなかに緩やかな移動の時間軸、つまりスローモビリティの仕組みをどのように入れていくか。東京を、一九六四年の東京オリピックが目指した「より速く、より高く、より強く」という価値に呪縛された都市（「灰色の男たち」の都市）から、むしろ二二世紀に私たちが追求すべき「より愉たのしく、よりしなやかに、より末永く」という価値が息づく都市（モモたちの都市）にどう転換していくかという課題に、街歩きをしながら挑戦したいと思います。

そして、そのために本書が提案するのは、東京都心に路面電車を復活させること、具体的に

は、現在の荒川線を延伸し、浅草、上野、秋葉原、神保町、飯田橋なども回っていくスローでバリアフリーな環状トラムを実現することです。この提案に沿って、私たちは第一日には鬼子母神から荒川線に乗って街歩きを始め、第二日にはまだトラムのない秋葉原から上野を経由して浅草まで旅します。

第三日と第四日の街歩きで私たちが考えていくのは、東京がその長い歴史のなかで積層させてきた四つの時間層の関係です。東京は三回「占領」された都市であるというのが、本書の基本的な視点です。最初の占領は一六世紀末、徳川家康によってなされ、二回目の占領は一九世紀後半、明治維新のなかで薩長政権によってなされ、三回目の占領は一九四五年、米軍によってなされました。このそれぞれの占領後、東京都心は大規模に改造・改変されていきます。

しかし、ここが街歩きにとっては決定的に重要なのですが、武蔵野台地の東端で大小の川が複雑な微地形を形成してきたこの都市では、過去の時間層の痕跡が完全に抹消されてしまうこととはありませんでした。家康以前の東京、薩長以前の東京、米軍と高度成長期以前の東京が、今もまだら模様に残り続けています。東京では、過去が目に見える都市の痕跡として生き続けているのです。——これは、東京という都市の最も貴重な面白さであり、私たちが大切にしていくなすべき価値です。第三日と第四日には、上野から谷中にかけての一带を中心に、この微地形

のなかで入り組む異なる時間層を十分に渡り歩いてみたいと思います。

第五日と第六日の街歩きは、先ほど述べた聖地巡礼とつながります。つまり、都市のなかの非日常的な時間の場を歩いていきます。非日常的な時間として取り上げるのは、一方は「知の時間」、他方は「聖なる時間」です。どちらも世俗の日常的な時間には従属しません。どこか、そのような時間の流れを超えた地平でこそ営まれるという性質を持っています。

しかし、両者が日常を超越する仕方は違います。「知の時間」は日常を水平的に超えます。日常の時間では、私たちは来月のことや一年後のことで頭がいっぱいになってしまふのに対し、「知の時間」が相手にするのは、もつとずつと短いかずつと長いからです。一瞬であるか、数十年、数百年、数千年、数万年、数億年であるか、桁外れの幅を持った時間です。

他方、「聖なる時間」は神仏との関係を生きる垂直的な時間ですから、この時間は礼拝や祈禱、墓参に使われます。私たちは、前者では神保町から本郷の東大キャンパスまでを歩き、後者ではニコライ堂や湯島聖堂、神田明神、湯島天神といった社寺会堂を渡り歩くつもりです。

これらの「知の時間」や「聖なる時間」の諸空間は、概して東京都心北部の尾根筋にあります。尾根筋を歩く五日目、六日目に対し、最終日、私たちは日本橋川、神田川、隅田川などの川筋を巡ります。第一日に、石神井川に沿って街歩きをしますので、初日と最終日で、私たちは、

隅田川、石神井川、神田川、日本橋川という都心北部の四つの川すべてを体験することになります。

東京は、そもそも川の都市です。ベネチアのような運河の都市とは少し違い、台地を削り取りながら川が蛇行し、台地の突端が複雑な地形をなし、低地では水運が経済を支えた時代が、明治のある時期まで続きました。そこから展望されていた東京の未来は、この都市のその後の実際の歴史とは異なります。大正以降の東京は、「川の都市」から「陸の都市」へ、とりわけ鉄道と路面電車の都市へと変化していきました。さらに戦後は、その路面電車も消え、自動車と高速道路の都市に変貌します。この大転換のプロセスを通じ、私たちが何を感じられなくなってしまうのか、都市からどんな時間が失われたのかを歩きながら考えます。

今日、川辺への関心が復活してくるなかで、日本橋川や神田川、隅田川の水上演習に参加するのはかなり容易になっています。これは、一つの可能性があります。川の上からこの都市を眺め直すことで、東京という都市の見え方はかなり変わります。

今のところ、川からの眺めは、多くの人々にとって裏側の眺めです。川沿いのほとんどのビルは、川に背を向け、その向こうの表通りばかりを意識して建てられています。しかし、川から都市を眺めることがより多くの人々に経験されていくならば、どこかで川からの眺めをこの

都市の表の顔にしていく機運が生まれるでしょう。つまり、東京を裏返す可能性が出てくるのです。

この本では、それぞれの日の街歩きの最後に、未来の東京への提案をしています。スローモビリティの路面電車の復活、首都高速道路の撤去、上野駅正面玄関口の広場のリデザイン、上野公園のナイトパーク化、寛永寺と不忍池の復興、都心北部の多様な宗教の連帯、木造低層の歴史ある街を世代を超えて守る制度改革等々です。これらの計画は、「東京文化資源区」構想として、実際に都心北部で動き出しているものです (<https://tchajp/>)。この構想は、歴史的な文化資源が集積している上野や本郷から秋葉原、神保町までの都心北部を、路面電車や散歩道などのインフラでも、文化イベントや知的コンテンツでもつなぎ、半径約二―三キロの「古いから新しい」統合的文化ゾーンを創り出していくこうとするものです (図)。私自身、この構想を立ち上げたメンバーの一人で、今も全体の推進役をしています。

私たちはこの構想で、現代東京の表層下に生き続ける過去の資産を蘇よみがえらせようとしています。これは決して「復古」ではありません。私たちが認識すべきなのは、ただ過去を切り捨て、右肩上がりの直線的な時間軸の先に「未来」を追い求めてきた近代が、決定的に終わりつつあることです。「成長」の時代から「成熟」の時代への歴史の大転換のなかで、過去は直線

的な時間軸の後ろに切り捨てられるべきものではなく、むしろ螺旋を描く時間軸の先でさまざまなヴァリエーションを持つて反復されるものとなります。まさしく、モモがその道連れのカメから学んだように、「オソイホド　ハヤイ」時代が来ているのです。

さて、私が集英社新書編集部との街歩きを終えたのは二〇一九年秋です。翌二〇二〇年春、東京は新型コロナウイルス感染症拡大のなかで活動の停止状態を経験しました。加速度的にスピードアップしてきた都市に、急ブレーキがかけられたのです。突然の活動停止に直面し、私たちは際限のない都市のスピードアップが崩壊の危機を孕むことに気づきました。二一世紀の東京を、さらなる超高層化と情報化を遂げ、大量の人とモノ、資本が強靱なシステムに支えられて高速で行き交う都市にしていこうとする方向に、私は同意できません。なぜならば、それは人間的な都市ではあり得ないからです。都市を人間のためのものに取り返すには、むしろスローダウンこそ必要です。本書の街歩きは、そのための有効な方法を模索する旅なのです。